

英語所有構文に見られる英語全体に浸透している 言語傾向との接点に関する考察

平見 勇雄

A study on the commonality pervasive in English language between the forms called possessive genitives and of-genitives (double genitive) and the other constructions

Isao HIRAMI

Abstract

We have seen in the previous papers that “English possessive genitives” and “of-genitives” have each characteristic, and that its form has an enormous effect on each usage. There is a close relation between form and meaning in English, but what we would like to represent is expressed with limited forms, which causes the gap between form and meaning and ends up with some exceptions.

The aim of this paper is that we try to elucidate some difficult examples that the English language has a tendency to create.

Key words : tendency of the English Language possessive genitives of-genitives

キーワード：英語の特徴、所有構文、of の構文

はじめに

この論文では前回に引き続き、これまで扱ってきた所有構文、of-genitives の用例に関して説明出来ていない例を扱い、背後にどういった理由が隠れているのかを明らかにしていきたい。各言語はそれぞれ他言語と比較すると他言語には見られない言語特有の傾向が見られる。英語には英語特有の傾向があり（もちろん他の言語にも存在している可能性があり程度問題である場合も多いが）日本語には日本語特有の傾向がある。そしてそれぞれの言語全体の傾

向が個々の構文に影響し、構文自体が持つ約束事に触れている可能性もある。その影響は同じ言語だからこそ起こり得ることであり他言語には表れない特徴と言えるかも知れない。意味と形式が密接な関係を構築している英語においては言語全体に浸透した特徴と個々の構文の特徴が衝突する可能性も秘めている。限られた数の形式の中で表現する制約から生じた（と推測される）現象と言い換えてもよい。そういった例のいくつかを紹介しながら、最後に所有構文の本質を考えてみたい。

1 end-weight の傾向と所有構文

これまで折に触れ英語は形式と意味が密接な関係を築いていることを紹介していくつかの例を取り上げてきたが、その一方で形式と意味が完全に対応していない（つまり形式と意味にズレがある）例も見られた。認知言語学という枠組の中で見た場合一般的によく知られたものの一つは他動詞と自動詞の目的語への影響の例であろう。普通多くの例で他動詞の方が自動詞よりも目的語に与える影響が強いが、他動詞すべてが自動詞の場合より目的語に強い影響を与えるわけではないし、自動詞の中にも他動的な影響を目的語に与えるものがある¹⁾。

ただこういった形式と意味のズレはすべて同じ理由から生じているとは限らない。中には言語特有の傾向が影響していると考えられるものもある。英語の特徴の一つに end-weight と呼ばれるものがあるが、この特徴も以下で見るように所有構文のある用例にズレを生じさせていると思われる。

英語は日本語と比較すると文の形や語順が大きな意味を持つ言語と言える。英語では能動文を受動文に書き換える際、語順の入れ替えが日本語と違って必ず起こるし（日本語は助詞を変えるだけで済む場合が多い）、主語に関して言えば、天候、時間等を表現する際、it が主語にたてられて使われるのを始め主語が省略されることは少ない。

そういった語順の特徴の一つに英語では主語があまりにも長くなると文の後ろに置いて表現形式がある。倒置は形式を整えたり、ある内容を強調したり、さまざまな理由で起こる。There 構文を使ったり、いわゆる It~to、It~that の構文と呼ばれるものもそれらの一つに数えられる。

こういった倒置と全く同等に扱うことは適当とは言えないが、名詞の前に単独で置かれる現在分詞、過去分詞が修飾語を伴った時、後ろに置かれる現象と形の上では少なくとも類似点がある。

a sleeping baby

a baby sleeping in the cradle

修飾語があると後ろに置かれるのは、よりたくさんの情報を持ち語数が多くなるため、形を整えることと関連しているだろう。こういった例をいわゆる end-weight と一般に呼ぶことはない。ただこれと似た例が A's B, B of A の交代にも見られる。本来は言えない次のような例は情報量の多い名詞が後ろに来ると容認度が上がる。つまりこういった特徴が所有構文と of-genitive の交代の理由として働いていると推測できるのである。

*this car of John

??this car of the people who live next door

これは Taylor (1996: 261) の挙げている例であるが this car of John という表現はかなりおかしい例で許されない。所有関係が B of A で表現されること自体本来の用法から言えば間違っているからである。ところが同じ所有関係にあっても this car of the people who live next door という表現になると許容度が改善される。したがって A と B の間の意味関係は同じなのに A が長いと B of A になれるのは end-weight という英語に見られる特徴の一つがこういった場合にも関与していると考えられるのである。

End-weight とは呼ばれないが、B of A の形式の A に長い表現が来る傾向は以下のような例にも見られる。

The fact of my having met him

B of A の形式は A, B のどちらに一方の内容（中身、あるいは部分）を意味する表現を置くことも形式上制限されていないので、B に長い内容が来る表現があっても良いはずである。しかし実際にはこの例と逆のパターンは存在しない。したがってこういった B of A の例にも end-weight と呼ばれる英語の語順傾向と同じ原理が反映されていると考えられる。

この特徴が形式と意味が密接な関係を持つ言語に見られることにそれなりの理由を見つけられるように思われる。It~that、It~to の構文は、いわゆる英

語の5文型さえも逸脱する結果となっている。また *this car of the people who live next door* も本来は A's B、B of A それぞれが担う意味と形式の約束事を破っている表現である。しかし一つのかたまりを作っている長い句や節がさまざまな表現や構文で後ろに置かれる方向に動けば、個々の形式とは別の意味で（つまり全体的な形式の傾向（あるいは共通性）の点で）一貫性が出てくる。個々の構文という単位ではなくあらゆるよく似たケースの全体的特徴として一つの傾向が確立していくとそれもまた一つの「形」の特徴として定着すると言えるのである。したがって全体としての「形」を一貫して発展させると、それは個々の表現や構文にも当然影響するであろう。そのため全体的傾向を反映した用例のいくつかは個々の構文の反例となり、構文内だけで成立する規則を破っているように見えるのである。しかし（繰り返すが）大きな視点から見ると全体的特徴もまた一つの「形式」と見なすことができるため、そういった特徴が該当する表現に適用されるのは理にかなっているのである。

相反する二つの要素が衝突した場合、結局はどちらか一方が優先されなければならない。相反する立場になくとも *the fact of my having met him* の例のようにどちらにどちらの内容を置くかが形式上決まっていない場合は言語の持つ全体的傾向から自然とその位置が決まる。しかし特定のある言語形式だけに限って有効な約束事が守られると同時に言語全体に定着している約束事もまた守られなければならない場合、時に個々の形式においては例外的な用法が生まれることになるのである。それは形式と意味が密接に結びついている言語であるがゆえに起こる。

したがって B of A が本来は担わない意味関係（所有関係）であるにもかかわらず、英語全体に見られる end-weight の傾向が個々の構文にも浸透しているために、*this car of the people who live next door* といった表現の容認度を上げることに貢献している

のである。

2 主に親族関係における二重構文の用例について ——なぜ反例と思える例に見えるのか——

1 で見たような言語全体に広がっている傾向が個々の本来あるべき意味と形式のあり方に影響し、その関係を崩してしまう例は他にも見受けられる。そこでも二つの相反する要素がせめぎあいながら表現が形作られている。本来の形式と意味の関係から考えると逸脱した形に見えるが、多くの場合1で見たように決してでたために逸脱しているのではない。英語という言語内のある約束事に基づいた結果起こるものである。次のような例もその一つと考えられる。

Who do you think will win the election ?

Do you ~ で始まる疑問文は普通その受け答えに Yes, No を要求する。しかし think, suppose 等の動詞が wh を従属節とする場合は Yes, No を期待しているわけではなく wh 疑問文と同様の答えを要求する。そのため形式が重要な意味を持つに至った英語においてはこういった文では wh を文頭に出し、答えを要求している内容に沿う形式にして文型を外れた語順に並び替えているのである。

初めにも述べたように形式と意味が密接な関係を築いてきた英語では、限られた形式の範囲内で表現したい意味関係を収めなければならない。それは形式で表わされている表現のすべてがその形式が受け持つ典型的な意味関係とぴったり一致しているわけではないことを意味している。そういう制約のもとに意味と形式の関係が成立している以上、プロトタイプという考え方と大きな関係を持つ。（意味と形式の関係が緩やかな言語にももちろんプロトタイプ効果は見られるが両者の関係がどの程度まで密接で実際の用例に広がっているかは言語によって異なる。）一方で別の見方をすると（こういう言い方が適当かどうかわからないが）形式と意味のあり方に

何らかの歩み寄りが必要となる。その場合起り得るのは大きく分ければ次の二つである。一つはこれまでにはない新しい形式を生み出す方向に進む可能性、もう一つは現存する形式のどれかを使って表現する方向である。しかし後者の場合は先ほど述べたように伝えたい意味内容にピッタリした形式がないことになるから形式と意味の対応には当然ズレが生じる。

このズレには二段階あると思われる。一つは形式が従来以上に連続する意味関係を受け持つ方向に幅を広げていく段階、もう一つは意味関係との連続性ではなく形式の持つ特徴の共通性である。すなわち違った意味関係ではあるが、複数の表現の間には別の点での共通性が見い出せるため統合されるということである。事実、A's Bで表現される各意味関係がそうであった。平見(2004)で述べたようにA's Bの形で表される関係、すなわち人と物の(いわゆる所有と呼ばれる)関係、具体物と抽象名詞の間の関係、全体と部分の関係、既出と新出の関係などはおたがいに意味的な関連があるわけではない。しかしAとBの顕在性に格差があるという点では共通しているので同じ形式が使われるのである。したがってB of Aの形式においてもA、B間に成り立つ部分全体関係の種類が広がっていくと同時に、意味関係以外の面で共通するところがあればこの形式が使われる可能性が出てくるわけである。ただそういった例は意味関係の点での共通性がない(あるいは希薄になる)ので(言い換えれば形式と意味との関係の点で多くの例は共通性が見出せるのにそれらには見つけられないので)、なぜこの形式でそのような例が表されているのかという疑問が起り反例に見えてしまう。その上に1のend-weightの例で見たような全体的特徴が加わり、一つの構文に複数の要因がからんでくると、ますます意味と形式の関係を乱すことになり、背後の規則が見えづらくなってしまふのである。

こういった、B of AにおいてAとBの意味関係以外の要因がからんで定着していると思われるのが、いわゆるdouble genitiveと呼ばれる構文の親族関係を表現する用例である。部分全体関係の一部の例もそうだが、ここでは親族関係の例を詳しく検討していきながら、今述べた意味関係以外の、形式の持つ特徴がさらなる表現の拡大に貢献していることを見ていきたい。

Taylor(1996:327)によるとこのdouble genitive(a friend of mineのような例で日本語では二重属格と呼ばれているもの)はシェークスピアの時代以前からある表現で、この形式にはgenitive(of)とpossessive('s)の両方が同時にあることから以前より多くの論争を引き起こしている。何がこの表現の問題となっているのか、Taylorが取り上げている表現も紹介しながら見てみたい。

Taylorが問題と考えているのがthat husband of Mary'sのような例である。Jackendoff(1977:116-19)やQuirk et al.(1972:890)に主張されているようにa friend of mineという表現は解釈としてはone of my friendsを意味している。そのためB of A'sのBとA'sが部分全体関係にあるとするとMaryは複数の夫を持っていることになる。そこでTaylorはB of A'sではBとA'sが同格関係にあると主張しているのである。(私見ではTaylorが考えている問題に留まらないし、Taylorの提案している解決策にも問題があると思われる。)

まずはこれまで論じていないB of AとB of A'sの違いについて見ておきたい。Aが所有代名詞(A's)の場合と単なる目的格(A)の場合、両者に次のような意味の違いがある。上の二つの例はBが物(portrait)の場合、下の二つの例はBが親族関係(student)の場合である。

- a. a portrait of John
- b. a portrait of John's

a. a student of Kant

b. a student of Kant's

a はそれぞれ「ジョンを描いた絵」「カントを専攻している学生」という意味で、b は「ジョンが持っている（あるいは描いた）絵の一枚」「カントが教えている学生の一人」という意味になる (Taylor 1996: 328)。b の例はそれぞれ A's が B の複数を意味していると仮定されるので a portrait of John's portraits, a student of Kant's students と解釈され、それが今述べたような意味になると考えられている。特に B が物 (portrait) の場合、A's と A が同時に使われ語順が前後で変わろうとも意味の混同は起こらない。

a portrait of John's of Tom

a portrait of Tom of John's

これは A's と A の間には意味の上ではっきりした区別があるからで、そのため以下のような表現は許されない。

*a portrait of John of Tom

*a portrait of Tom of John

どちらの A がどういう関係を B と築いているのかがわからなくなるため許されないであろう。上の例から明らかなように A's は B が物の場合、間違いなく複数の B を意味している。そこで先ほど述べたように that husband of Mary's という表現の Mary's と husband の関係もここから考えると、複数の夫がいてその一人と解釈されるため、Taylor は別の考え方を提案しているのである。

しかし英語の構文にはいくつもの複数の要因が意味と形式の間からんで成立していることを見たように、親族関係の例から B が物の場合 (所有関係) の B of A's の解釈までも間違いと結論づけてしまうのではなく、もっと別の点も考慮して (英語の各構文が成立している過程なども考慮して) この例を検討する必要がある。Taylor の考え方 (A と B が同格関係にあるとの結論を私が支持しないのは同

格関係の場合 B が不定なら A も不定、B が定なら A も定になるからである。(Cf. an angel of a lady, the city of Rome) しかし、a friend of my friend を同格関係と解釈してしまうと B が不定、A が定となってしまう。) を支持するかどうかはともかく、この表現は親族関係の場合、別の問題を生じている。それは所有代名詞で表される A's は本来所有物しか意味せず、物以外のものが来ることが出来ないからである。

This car is Mary's.

*This sister is Mary's.

したがって a portrait of John's では B が物なので A's が B の複数を意味することに問題ないが B と A's の関係が親族関係になっている点で A's が何なのかという問題を生じてしまうのである。なぜコピュラ文では基本的に許されない表現が B of A's では許されているのであろうか。

その前に問題となっている親族関係の A's の's が実際は何を意味しているのかを見てみたい。親族関係は B of A でも B of A's でも表すことができるようであるが厳密には次のような意味の差、あいまい性を持っている。

This man is a friend of Mary.

This man is a friend of Mary's.

この両表現には意味の違いが感じられないというインフォーマントもいるようだが (この点であいまい性がある)、次のような意味の違いがあるようである。友情というのは基本的に相互的なものだが、理屈を言えば自分がある人を友人と書いていても相手は思っていない場合もある。その違いが両表現には反映されており、細かなニュアンスの違いは以下のような例にするとよりはっきり出てくるようである。(Taylor 1996: 328)

Who told you that ?

A friend of your father's

If he says such things, he is not a friend of my father,

whoever he may be

拙訳

誰がそんなことを言ったの？

あなたのお父さんの友人の一人よ。

誰か知らないけど、そんなことを言う人は父の友人じゃない。

この例から判断すると B of A's が使われた場合は A が B を友人と認めているニュアンスがある。つまり B が物の場合の B of A、B of A's と、B が人である場合の B of A、B of A's では A、A's がそれぞれ果たす役割は根本的に異なっていることになる。

なぜ親族関係の場合は以上示したような意味になり、A's が本来の所有代名詞の意味を失い違った役割を持つに至ったのだろうか。また（インフォーマントによっては違いの感じられない場合があるものの）違いが感じられる場合は A が所有代名詞である a friend of your father's の表現に父親が B を友人と認めている意味が出て、a friend of your father の方は友人が父親を友人とみなしている意味合いを帯びるのだろうか。この逆が成り立っていないことには何か理由があるのだろうか。さらに所有物が B にくる B of A の場合と違って、親族関係の your father, your father's の時には絶対的意味の違いが感じられなかったり、時にはいずれの形でも使われ得ることがなぜ起こるのだろうか。

まずは A が所有代名詞の場合 B に対する働きかけのニュアンスがなぜ出てくるのかを考えてみたい。こういう意味を持つに至る影響として直接の根拠にはならないが、A が一人称の場合を考えると一つの可能性が推測できる。My friend という表現は A である私が B を友人と認めている表現である。そう認識していなければ言っている本人がこういった表現をしないからである。この表現に対応する形は a friend of me ではなく、基本的に a friend of mine すなわち B of A's の形である。三人称の場合これに倣えば、たとえば your father's friend という表現の

friend が一人に特定できない場合は a friend of your father ではなく a friend of your father's と所有代名詞が使われるのが本来の姿となる。（三人称の固有名詞の場合は語形の上では A's B の A's と B of A's の A's が同じとなる。）My friend という表現の A が B に対して果たす意味はこういった三人称でも一人称から類推されて引き継がれていると考えられる。

つまり your father's friend のような A's B の親族関係の場合に A が B に対し果たしている役割は次の二つということである。一つは Taylor が主張する A's B の形式で表される大半の A が B に果たすスキーマである①話し手、聞き手ともに A を述べると B をおたがいが了解できる（つまり特定できる）定冠詞相当の役割を果たしている、ということ、もう一つは②A が B を（たとえば友人等として）自ら認める意味合いを持つ、ということである。したがって親族関係の場合 A の B に対する行為の意が出ること、A's B に対応する形が B of A's であること、そして三人称固有名詞の B of A's の A's と A's B の A's の語形の共通性などが、間接的ではあるが B of A's の A's に所有の意味から B に対して働きかけの意味を醸し出させる原因になっていると推測できるのである。

ところで B of A、B of A's の形が親族関係に使われるのは次のような状況が大きな要因となっていると思われる。A と B の関係において社会通念上①の状況にない例は多く存在する。たとえば同じ親族関係でも夫や妻なら我々が生きている社会では一夫一婦制が確立しているため A を述べたら B は必然的に一人に決まる。しかし友人のように普通複数存在するような場合 A が B を特定する特徴を担っている A's B の形式でこの関係を表すのが適当ではなくなる。そこで A's B に代わる形式が必要となる。その候補となるのが B of A である。なぜなら B of A の形式は A と B の関係によって定冠詞となるか不定冠詞となるかが決まる形式だからである。A's

BのようにAがBに対して定冠詞相当の役割を同時に兼ねる特徴を持っていない。その意味でB of AやB of A'sは上記のような関係を表現するのに適した形式なのである。

ではa friend of Mary'sとa friend of Maryの両形式が可能となっている根拠として推測できる理由は何であろうか。B of Aが使われる理由から言えば、A'sが本来所有代名詞であることから推測されるようにa friend of Mary'sのMary'sが厳密な意味で所有物以外を意味しないことから、親族関係の場合の'sが何を指すのかがはっきりしないから不必要なものとして落ちるということである。

もう一方のB of A'sに関しては先ほども間接的な関連は述べた。しかし別の意味を持つ方向に変化する理由にはこれ以外でもよく似た特徴が見られる。A's Bで表現される動詞派生名詞の例を見てみると、普通は主格としての役割を果たすことが多い。

(もちろんAがBに対し必ずしも働きかけを持っているわけではない。たとえばLincoln's assassinationという表現ならLincolnはBと目的格の関係にあり働きかけがあるわけではない。AとBの解釈には我々の常識的な範囲での推測や知識が大きく働いている。) またA's Bの用例の一つである所有関係と呼ばれるAとBの関係もAが人でBが物であることから我々は無意識に大半の二つの間にAからBへの働きかけを読み込んでしまう。(ただしこれも、たとえばJohn's pictureの表現に「ジョンを描いた絵」(あるいは「ジョンの写った写真」)という解釈もあることから絶対的ではない。こういった意味の場合でもA's Bが使われるのは池上(1991: 65-79)にあるように英語には人間中心主義的な面が反映されていることが強く作用していると思われる。) つまり動詞派生名詞の多くの例でAは主語としての役割を持ち、また所有関係においてはAからBへの働きかけを想起させ、部分全体関係では全体であるAが部分の来るBをコントロー

ルする役割を持っていることなどから、A'sには我々のこういった「読み込み」が無意識に定着している。しかも所有代名詞は基本的には所有していることを意味している。しかしあるもの(こと)を所有するには所有者がもともと備えている場合以外は普通、何らかの行動を自ら起こさなければ所有できない。したがって所有にまつわる意味合いが次第にA'sという所有代名詞にも所有格同様の解釈をにじませる助けになったのではないと思われる。

つまり本来Bが物の時に使われるB of A'sの表現にBを特定しないという形式上の特徴があるため、その形式の特徴から親族関係にもそれが応用されたことが一つ。A'sに関してはA's Bの所有格の時にA'sに多く感じられるニュアンスが同形のA'sにも類推され'sの意味変化を引き起こした、という可能性と、親族関係の場合の'sが何を指しているかが本来の使われ方からすると不明なために'sの削除をもたらした、という可能性が考えられるのである。こういった理由からdouble genitiveと呼ばれる構文がB of A同様親族関係の意味関係にも広がったと推測できる。

蛇足ながら、こういったそれぞれの事情が存在しているために二つの用法が共存している例はB of A、B of A's以外にも見られる。たとえば以下のような例におけるmyかmeの選択もその一つであろう。

Would you mind me (my) opening the window ?

Mindのあとの名詞は動詞の目的語ととらえられれば目的格のmeとなる。しかしそのあとの動名詞のopeningが名詞としての品詞の色合いも持つことから所有格myを置くことのできる環境にもある。したがって中間的立場にあるという点で二つの用法が共存するのである。

ただ同じように中間的立場にあると言っても親族関係の場合とは次の点で異なっている。典型的な部分全体関係がB of A、B of A'sどちらの用例でも

違ったあり方で成り立っている a portrait of John, a portrait of John's の場合と異なり、親族関係 (a friend of Mary's, a friend of Mary) の例はいずれの形式で表されている A と B の関係も本来形式の担う意味関係とは合致している関係にないという点である。繰り返すと Mary's friend という表現では B が特定される意味合いが出てしまうため A が B を特定する関係を表さない形式で表したいという理由で A's B の形式が回避され、B of A の形式を借りて表現されている。しかし親族関係の場合は A と B の関係が B of A, B of A's いずれの形式であっても本来の形式の担う意味からすると適切とは言えない意味関係であるという点で中間段階にあり、双方の形式が使われているのである。

何度も述べたように英語は意味と形式に密接な関係を築いているが形式の数は限られているわけであるから、存在している形式の中で意味と形式以外の点である接点を見出すことができるなら、それが代用されることは言葉の経済性から言ってももっともなことなのである。

3 A's B の拡張と B of A's の拡張の方向の違い

2 では所有構文、of-genitive が受け持つ意味関係の拡張する方向性を言葉の経済性という点も交えて考えてきた。意味的な関連性だけでなく、形式が果たす役割もまた用例の拡張につながるということであった。しかし A's B, B of A's それぞれが用例を拡張していく方向に影響を与えている別の要因もある。それは A の特徴である。なぜならこの二つの A はそれぞれ品詞が所有格、所有代名詞と違うからである。それが A's に来る名詞の違いにもつながっている。たとえば A's B の A は人を基本としながらも人ではない、いくつかの名詞が現れる。Swan (1985: 424) が指摘した例は次のようなものである。

the plan's importance, the report's conclusions

the university's president, the book's author

人と密接な関係を持ついくつかの名詞以外にも、たとえば the ship's funnel のように A が人ではない場合も A's B では可能であった。これは一つには A's B の A の視覚的な点での顕在性を初め、人間の意識にのほりやすいものの顕在性が A に来る条件として大きなウエイトを占めているからだと思われる。たとえば視覚的な顕在性に関して言えば動くものとそうではないものという区別は重要で、それ故必ずしも生物、無生物のそれと一致していない。A's B の A に植物が来ないのは生物であっても動かないから顕在性が低く無生物の扱いを受けるのであろうし、逆に船は動くから無生物でも顕在性において生物に準じる扱いを受け A の位置に来るのであろう。我々はさまざまなものとの関係に顕在性の格差を無意識に感じ、一方にまず着目する傾向があるが、具体抽象、全体部分、既出新出などの対比に感じられる顕在性の格差以上に、動いているものとそうではないものの顕在性の格差がどのような二者間の格差よりも重要な要因であるために人を中心とした (行動する) 生物 (A) と無生物 (B) の (所有関係と呼ばれる) 関係を A と B の関係の中のプロトタイプと感じさせるのではないかと思われる。))

一方で、あることを表現する場合必ずしも目の前にあるものだけを我々は言語化するわけではない。これまで見聞きしてきたようなものも含め、蓄積してきた知識の中から意識に上りやすいものを取っ掛かりにして我々は文を発する。その点から言うと、A が人でなくとも Swan の挙げた人間と関係の深い言葉は、その言語圏では文化的に人の意識に常に上りやすく頻繁に使われるものばかりだから A の位置に来るのであろう。もちろん言語には蓋然性の高い部分もあるから頻繁に使われるすべての例が慣習となって定着したわけではない。その意味では何が定着し、何が定着しなかったかは結果的に知る以外

方法がない。説明のつかないところも出てくる。しかし現在でも残っているこういった表現は形式の担う特徴と何がしかそれなりの連続性を見つけることが可能なため A's B で表されると考えられるのである。顕在性という A の性格を基本に A's B の A の語が決まるためにこのような拡張が起こるのである。

一方の B of A's の A's はこれまでこの形式を見てきたことから明らかだが、A と B の顕在性をもとに A と B の語順が決まって表現されているわけではなかった。しかも A's B の場合と違い、この A's は所有代名詞なので、文字通り何かを「所有」できる「生物」以外は許されない。そのため A's B の例の一つである the ship's funnel に見られるような無生物の表現ができない。

a funnel of the ship

*a funnel of the ship's

しかしこの形式においても意味と形式の関係は出来るかぎり保つ傾向を持ちながらも、一方ではある表現を A's B か、この形式を使って表さないといけないという制約下にあるため、さらなる表現の拡張を引き受けることになる。そうなることあり得る拡張の可能性は B との関係における拡張しかない。本来所有物との関係しか許されないはずの形式 B of A's が a friend of Mary's のような、B が人の例に拡張したのは A が人以外許されないという制約も要因と考えられるのである。つまり B of A's の A's に来る語の制約と言葉の経済性の点から A's B とは違った方向に拡張が起こることになるのである。

A's B と B of A's の A's はそれぞれ所有格、所有代名詞と品詞が異なり、その上両形式はかなり違った特徴を持っている。そういったことと意味と形式の密接な関係、制約など複数の条件が、それぞれの A's が「人」を中心としながらも用例の拡張の方向性に違いを生み出していると思われる。

4 両形式で表され得ることに影響しているその他の要因

——概念の連続性と所有関係から部分全体関係への転換——

ところで1と2で見たような、A's B が B of A あるいは B of A's で表される理由はこれまで述べてきたこと以外にも考えられる。まず B of A の例については A's B の典型である所有の概念とのつながりが大きな役割を果たしていることを指摘しておきたい。A's B が所有関係を典型的な例とし、それに対して B of A、B of A's はいずれも部分全体関係を担う形式であるが、これらの概念は典型的なケースでははっきり区別できるが、A と B 二つの関係がどのような関係かがはっきりしない場合もある。所有関係は基本的に A's B で表されなければならない。しかし実際は所有関係、部分全体関係、親族関係はそれぞれ密接な関係を持っている。一番わかりやすい日常的な例を挙げると、女性が赤ちゃんを身ごもり、生んだ場合、状況によってどの関係にも近く、しかしどれとも断定できず、またどの関係にあるとも言える。赤ちゃんの場合、時間的経過が母親との物理的関係を変化させ、客観的に関係の判断をしやすくもするが、靴や手袋のように別個の存在であっても二つで一つ（つまり一体）にみなすこともできる。そういったとらえ方を我々が物事に対して行う性格を考えると、赤ちゃんのように生まれても自分だけでは生きていけない存在であることが、母親への依存性を高め、個としての存在と完全には見なすことが出来ない面がある。したがって部分全体の概念をかなり緩やかにとらえると、所有関係や親族関係の概念と接点を見出すことができる。つまりあらゆる種類の部分全体関係を担う B of A の形式と相容れないものではないことになる。所有関係を表している the house of my father という表現が、新コンサイス英和辞典、第二版 三省堂 p.789では B of A の用例として掲載されている。こういった表現は

フォーマルな言い方として時々使われたりする。1で扱った *this car of the people who live next door* のような表現が所有関係にあってもかなり改善された表現と感じられるのは *end weight* の要因以外に概念上のつながりが存在することもある程度影響しているに違いない。これがまた *A's B*、*B of A* の用例の違いを明瞭に区別できないこと（つまりは両形式で表され得ること）にも関係していると思われるのである。

もう一つの *B of A's* に関して。A と B の間の意味関係が親族関係ではなく所有関係であれば *B of A's* と *A's B* の両形式で表すことに問題はない。なぜなら *A's B* の *A's* も *B of A's* の *A's* もその拡張の方向性は違っていても、基本的に所有関係を意味しているからである。かつてより *B of A's* に *of* と *'s* が同時に一つの形式にあることから多くの議論を巻き起こしてきたと Taylor (1996: 327) に主張されているが、むしろ *of* と *'s* の両方があるからこそ両形式の交代を可能にさせたと言えるのである。たとえば *John's portrait* と *a portrait of John's* の関係を見ても *A's B* は「ジョンが持っている絵」という所有関係そのままであるが、*B of A's* は A が所有する複数の絵の中の一部 (B) というような意味関係に変化させて A と B の関係を表現している。つまり「ジョンが持っている複数の絵の一枚」というふうに A を *A's* にすることによって *A's B* の *A's* の所有の意味を保ちながら、A と B の関係を部分全体関係に持ち込んで表現しているからである。しかもこの形式で表すことにはもちろん意味がある。形が違えば意味も違うという基本的約束を守りながら *A's B* では表せない不特定の一枚を *B of A's* の形を使って言い表すことが出来るからである。これは Langacker (1993: 12) が本質的關係と述べたことでは説明できない。やはり部分全体関係を形式の基本と考えるからこそ結論として出てくることである。*B of A's* の形式に *of* と *'s* の両方が同時に存在す

ることは決して重複していたり Taylor の言うような説明に窮する現象ではないのである。

最後に *that husband of Mary's* の例の *that* について簡単に述べておきたい。*A's B* の A が基本的に定の役割を果たすため、不定の意味を表したい場合は *B of A ('s)* の形式が使われることがこれまでの議論で説明された。したがって *the husband of Mary's* という表現は出来ない。単に定冠詞の *the* がつくのであれば *A's B* で表現すればよく、わざわざこの形式を使う必要はないからである。しかし *that* という、定冠詞が持つ以上の意味内容を含んでいる語であれば新しい意味をつけ加えられるので置く意味が出てくる。これはまた、定、不定の両方を許す *B of A* の形式であるからこそ、こういった表現が可能となるのである。

5 所有構文とは

日本語に比べると英語が人間の認識を形式にずいぶん反映させた言語であることは何度も述べたが、その一つが文の S (典型的には *agent*) と O (典型的には *patient*) における両名詞間の顕在性の優劣である。人が先に目を向けるものが言葉の上でも先に述べられており、その点から S と O の語順が説明される。これと同様の原理で顕在性の優劣による格差から *A's B* の A と B の語順も説明された。

A's B はこれまで見てきたように A が典型的には人であるが、この A が顕在性をその基盤にしていることから考えると、なぜ人になるか想像がつく。それは人がもっとも多く深い関わりを持たざるを得ない対象は何かと言えば間違いなく人間 (池上 1991: 78) だからである。しかし人を表現する語はさまざま、固有名詞から一般的な人を指す語、それにこれまで見た親族名詞のようにある視点からその人をとらえている表現もある。

ところで A が固有名詞だと *A's B* で表現された場合 B が必然的に一つに特定される特徴を持つ。

つまり決定詞 (Determiner) の役割を同時に果たす。しかし A が一般的な人を指す語になると特定の意味合いが薄れ determiner の役割を持たなくなる。逆に固有名詞であっても *Plato's problem*, *Halley's comet*, *Parkinson's disease* のような、かつては A が determiner としての役割を果たしていたものでも A と B の間に意味の特定化が起こり一語としての意味合いを持って固定化してしまうと determiner の役割を次第に果たさなくなる。Taylor (1989b) では A のスキーマを求める際に *descriptive genitives* と *genitive of measures* の二つを除外した。しかし実際には特定、不特定という区別があいまいである例 (たとえば *a man's skull* (Taylor 1996: 298-300)) もある。あいまいと言っても、文脈なくこれだけではどちらに解釈したらよいかははっきりしないというだけで、いずれにせよ A は定か不定いずれかを意味している。(もちろん文脈からも判断できない場合はある。)

今述べたような A's B の A の特徴、つまり定、不定のいずれかを果たしていることと名詞を述べる際に、定、不定冠詞のいずれかを伴うこととを重ね合わせると所有構文の A's が果たす役割が見えてくるように思われる。それと同時に B の名詞が既出であるか新出であるかを言葉上ははっきり表されることとも関係している。それは一旦文中に出ているものを指す代名詞が、決して A's や定冠詞、不定冠詞が使われることがないことからわかる。(**Tom's she*, *The he*). しかし日本語ではいずれも可能 (「トムの彼女」「その彼」)。つまり代名詞や固有名詞は既にかかなりの程度に既出、新出の意味を含んでいるのである。

これは英語の特徴の一つであり日本語はこの点でも異なっている。たとえば翻訳の影響もあるのであるが、既に一度述べた人を指して日本語でも彼、彼女と表現することはあるが、こういった言葉の照応は英語と決して同じような表われ方をしない。英

語では先生や両親のことを述べた後でも、二度目に必ず *he, she* で表現するが日本語では彼、彼女という言葉で表現したりはしない。しかし英語ではこういう代名詞はもちろんのこと、*this, that* も二度目は *it* で表現したり、名詞に限らず動詞が二度目に出てきた時も代動詞が使われる。この特徴は既出か新出かを表すだけでなく、同一のものを指しているのか、同種のものかをはっきりさせることともある意味で関係している。たとえば既出の名詞を二度目に表現する場合、英語では *it* を使う場合と *one* を使う場合に分かれることにもその性質が見られる。

He lost his umbrella. So he bought a new one.

He lost his umbrella. But he found it the next day.

日本語にも「同一の～」 「同種の～」 という表現はあり、英語にも *the same ~ as*, *the same ~ that* という表現はあるが、日本語の場合上の両文のような例では前後の関係から同一か、同種かを読み取る場合が多い。また英語は可算名詞を表現する場合、*a* をつけるか、名詞の語尾に *s* をつけるか、単数、複数を明示しなければならないが、同時に別の次元で定冠詞の選択とも関係していて、特定のものなのか不特定のもの (*one of many*) なのかを明らかにすることまでもが言語構造の中に組み込まれている。

そういった傾向が言語に幅広く浸透しているとなれば、名詞を述べる形式の一つである A's B の A's にその基本的特徴を満たす機能があるのは当然である。文脈上顕在であるか、あるいは人間の認識、知識の上で顕在的存在であるかの条件を満たせば、それと関連する名詞 B は多くの場合特定される。そのため A's B には主に定の用法が確立しているのである。しかしそれらのものが慣用的に使われ意味が特定化されると、A、B 間の名詞に顕在性の差が感じられなくなり、平見 (2005) で見たように AB という形式が持つ意味合いとほぼ同じになる。だから *descriptive genitives* と同様の性格を持つように変化し、一つの単語と変わらない機能を持つようになる

のであろう。また逆に固有名詞に不定冠詞がついたり、A's がついたりする (cf. an Edison, Mrs. Brown's Mary) のも同様で、状況から B が本来の固有の意味を失うからである。いずれにしても基本的に A's が定冠詞の役割を果たし、時に時間の経過や状況によって不定の意味へと変化し、現在の用法として確立していると言えるのである。

一方の B of A はあらゆる部分全体関係を担うことから、その一つである one of many (つまり不定の性質) を引き受ける役割も持つことになる。しかしすべてがそうではない。A's B の A は定を軸にしているが、B of A の方は定、不定どちらも担う。両形式の用例の一部がどちらで表現してもよい (あるいは可能となっている) 事情にはこのようなことからんでいる。

ところで池上 (1980) の「する」的言語、「なる」的言語にあるように英語は文のみでできるだけ意味を完結させるという特徴を持っている。テキストやコンテキストに頼ることなくそれだけで内容を伝えるよう言語構造に組み込まれているので単数が複数か、あるいは既出、新出を言葉で表現する性格が強い。したがってこの特徴は単独で名詞を述べる場合だけでなく A's B にも当然浸透していると考えられる。また A は必ずしも人間だけでなく関係代名詞の whose の例に見られるように他の用法にまで拡大している。つまり関係代名詞の例からわかるように文脈との関連性にまで A's B の用法が拡大しているのは、A の顕在性は言葉の唯一性という特徴と基本的にかからんでいるからである。だから人間であっても複数だと they, them のような無生物も指す代名詞が使われることから、単数の人を意味する語には顕在性と唯一性が英語ではかなり表裏一体のものとして存在しているように思われる。定冠詞の持つ性格、つまり文脈から、あるいは知識からその名詞が一つに決まることと、固有名詞を筆頭に特定の名前を述べるのが唯一であることとは機能の

上で一致するため、そういった特徴の名詞が A に置かれるように固定したのだろう。つまり A に来るのは定冠詞の変種としての機能を果たす性格の内容のものかどうか重要になってくる。そう考えると文の内容を特定するような典型的な役割を果たしているのは文の内容を語る主語に来る人であり、時制であり、場所ということになる。あとは A に人、時、場所の何が来るかは B の名詞との関係で決まる。

時間のように目に見えない抽象的概念がなぜ顕在性の優劣を基本としている A's B の A に来るのかは Taylor, Nikiforidou (1991) が主張する「所有」を中心とし、それが用法上拡張していったという理論では説明できない。人や時間、場所などが A's B の A に来ることが出来るのは、名詞を表現する時に定冠詞相当の役割をそれぞれが関連ある名詞 (B) に対して果たすということが基本的な理由なのである。

まとめ

英語は語順に多くの意味や理由が隠れている言語である。一つ一つの構文は意味と形式の間に密接な関係を築いているが同時に、英語全体もある特定の傾向を発達させ、それが個々の構文に影響する場合もある。その影響が各構文内でそれぞれ成り立っている約束事に触れると反例となり、そのスキーマを崩すことになる。また構文は普通単独で存在するというよりは必ずそれに対抗するものを持つ。それは言語形式が我々の世の中のとらえ方をかなりの程度反映しているとすれば、その表現方法は一つではないからである。たとえば二つのあるものの存在をある程度受け身的に (あるいは無意識に) 外界の変化に沿うままにとらえ言語化することもあれば、二つの存在のあり方に我々がより主体的、積極的に介入して解釈し、全く違ったように描写しようとすることもある。能動態の形式に対し、受動態の形式が存

在する理由はそういったことがあるからである。A's B と B of A (あるいは B of A's) の形式が存在するのはもちろん理由があるからで、これらの形式にも我々の捉え方がそれぞれ反映されている。ただ外界のあり方は多くの場合決して二つにきれいに分かれているわけではない。そして典型的なあり方はそれぞれそのあり方に合う形が使われるので問題はない。しかしさまざまなあり方が存在し(そこには

当然我々の解釈が入り込んでいるが)、中間段階のものも存在する。それらを意味と形式の結びつきが強い言語傾向を持つ英語に限られた形式内で多くの表現を収めなければならないため、複雑な様相を呈しているのである。

注1) これに関しては池上(1991)のIIを参照。

参考文献

- 池上嘉彦(1980) 「する」と「なる」の言語学 大修館
- 池上嘉彦(1991) 「英文法を考える」 筑磨書房
- 平見勇雄(1997) John's picture, a picture of John における解釈の違いはなぜ生まれるのか—認知言語学的観点からの説明—吉備国際大学社会学部紀要 7, 279-284.
- 平見勇雄(1998) Of-genitive のスキーマに関する一考察 英語表現研究 15, 79-87.
- 平見勇雄(1999) 英語所有構文の形式の相違点 吉備国際大学社会学部紀要 9, 61-66.
- 平見勇雄(2001) 英語の所有構文の形式の相違点(2)—言語形式の選択に関係するいくつかの要素について—吉備国際大学社会福祉学部紀要 6, 105-112.
- 平見勇雄(2003) 英語の所有構文をめぐる疑問(2)—A's B B of A とそれに対応する日本語の「A と B」の比較—吉備国際大学社会福祉学部紀要 8, 55-66.
- 平見勇雄(2004) 英語所有構文の性質に関する再考—A's B、B of A の両形式で表される表現との比較から—吉備国際大学社会福祉学部紀要 9, 9-17.
- 平見勇雄(2005) 英語所有構文に現れるプロトタイプから外れる用例に関する考察 吉備国際大学社会福祉学部紀要 10, 91-104.
- Lagnacker, Ronald (1993) "Reference-Point Constructions", *Cognitive Linguistics* 4-1, 1-38.
- Nikiforidou, Kiki (1991) "The Meanings of the Genitive: A Case Study in Semantic Structure and Semantic Change", *Cognitive Linguistics* 2, 149-205.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Swan, Michael (1980) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.
- Taylor, John R. (1989b) "Possessive Genitives in English", *Linguistics* 27, 663-686.
- Taylor, John R. (1996) *Possessive in English*, Oxford University Press, Oxford.